

Title	ニュース・ソース研究の展開
Sub Title	A Review on news source studies
Author	李, 光鎬(Gwangho, E)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2003
Jtitle	哲學 No.110 (2003. 3) ,p.101- 120
JaLC DOI	
Abstract	Researchers have paid a good deal of attention to news source as an important factor which has large impact on news production process. This paper reviews those studies on news source by categorizing them into two research topic areas, sourcejournalist interaction studies and source bias studies. The "source-journalist interaction studies" have found that journalists would be affected by the interaction with news sources. It has been repeatedly reported by "source bias studies" that political and economic elites dominate news sources of almost every type of news. To focus more on news source itself as well as journalist will be needed for the future studies to understand the news production process more completely.
Notes	特集コミュニケーション課程の諸相 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000110-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニュース・ソース研究の展開

李 光 鎬*

A Review on News Source Studies

E. Gwangho

Researchers have paid a good deal of attention to news source as an important factor which has large impact on news production process. This paper reviews those studies on news source by categorizing them into two research topic areas, source-journalist interaction studies and source bias studies.

The “source-journalist interaction studies” have found that journalists would be affected by the interaction with news sources. It has been repeatedly reported by “source bias studies” that political and economic elites dominate news sources of almost every type of news.

To focus more on news source itself as well as journalist will be needed for the future studies to understand the news production process more completely.

* 東京工科大学メディア学部助教授

ニュースのコミュニケーション過程におけるニュース・ソース (news source) の存在は、最終的なニュースの内容形成にとって、さらにはニュース・メディアを介して行われる社会全体における情報や意見の流れにとって、大変重要な意味を持つ要因の一つである。

Chibnall (1975: 50) の指摘を借りるまでもないが、ニュースの生産に必要な原材料は、記者自らの直接的な観察よりも、「他人の選択的な解釈のなかから選別的に提供されるもの」であることが多く、そのためどういうチャンネルを通じ、どういう個人や集団、組織からニュースの原材料を収集するかが、ニュースの内容形成に大きな影響を与えるといえる。

また Sigal (1973: 2) は、「出来事に関する情報は他人、すなわちそれぞれ自分の解釈の枠組と守るべき利益を持っているソースから提供される。記者が接触するソースは、その記者が報道する内容をかなりの程度形作るのである」(傍点は引用者による) とニュースの内容に与えるニュース・ソースの影響の強さだけでなく、その影響が内包している方向性も重要視している。

1960年代の後半から1970年代におけるアメリカのニュース研究を展望している Gans (1983: 176) は、ニュースの生産過程に関する一連の分析結果を1970年代のニュース研究における主要な成果の一つであると評価した上で、この時期に行われた多くの研究がニュースの生産過程において最も主要な役割を果たしているのはニュース企業またはニュース組織であると結論づけていることに異議を唱え¹、ニュースの生産過程において「より決定的な役割」を果たしているのは、ニュース・ソースと彼らが代表している利害関係であり、そのなかでも特に重要なのはジャーナリストが定期的に報道する出来事を作り出す、権力と資源を持っているニュー

¹ Gans (1983: 176) は、1970年代に行われたニュースの生産過程に関する研究の多くが、このような結論を出すようになった理由の一つとして、これらの研究がニュース組織を分析の対象にし、またその中で行われたことを指摘している。

ス・ソースであると論じている。

本論文ではこのようにニュースの生産過程において重要な位置を占めていると認識されてきたニュース・ソースの問題をめぐってこれまで行われてきた研究を展望し、その成果と問題点を整理してみたい。

1. ニュース・ソースの概念

ニュース・ソースに関するこれまでの研究は、その研究問題から大きく、①ニュース・ソースとジャーナリストとの相互作用に関する研究、②報道内容におけるニュース・ソースの分布に関する研究に分けることができる。前者は、取材過程や記事を作成していく過程におけるジャーナリストとニュース・ソースとの相互作用に関心を持ち、主に参与観察やインタビューという方法を用いるのに対し、後者は、ニュース・ソースとの相互作用を含むニュース生産過程の結果として出される報道内容において、どのようなニュース・ソースがどれくらい登場しているかに焦点を合わせ、内容分析という方法を用いる。

さらにこの2つの研究群の間にはニュース・ソースの概念²においても相違が見られる。ニュース・ソースの概念がこの2つの研究の間で異なっているのは、追求している研究問題と用いる方法とを考えれば必然的なことであるといえる。ニュース生産過程に焦点を当てる研究者は、その生産過程で「ジャーナリストが依存したすべてのもの」をニュース・ソースとして定義しているのに対し、ニュース生産過程の最終産物である報道内容におけるニュース・ソースの分布に焦点を当てる研究者は、「ニュースのなかに登場しているもののなかでジャーナリストが依存したもの」をニュース・ソースとして定義しているのである。例えば Gans (1979: 80)

² ニュース・ソースの概念に関してはあまり議論が行われていないのが今までの状況である。これはニュース・ソースというものが、明示的な概念定義を必要とするほど曖昧な認識対象ではないという暗黙の仮定が研究者の間に広がっていたためではないかと考えられる。

は、「ジャーナリストが観察したり、インタビューした行為者 (actor) で、記事のタネや背景情報を提供した者も含む」としてニュース・ソースを定義しているのに対し、Reese (1994: 85) は、「ニュース作成のためジャーナリストが依存した、実際にニュースに登場している個人」にニュース・ソースを限定しているのである。

また、ニュースのなかに登場するものにニュース・ソースを限る場合、情報や意見が引用されるのではなく、単に行動が描写されているものをニュース・ソースと判断するかしないかの点でも研究者の間で意見が異なっている。例えば Smith (1993) は発言が引用されているものだけをニュース・ソースとして分析しているのに対し、Stempel and Culbertson (1984) は行動が描写されている者もニュース・ソースとして判断し、意見や情報が引用される度合いをそのニュース・ソースの支配性 (dominance)、行動が描写される度合いを顕著性 (prominence) とし、区分している。

一方で Soley (1992) は、ニュース・ソースという概念のなかには、出来事の関係者であるいわゆるニュース・メーカー (news maker) と、その出来事に直接の関連はないがそれに対し意見や解説を述べるためニュースのなかに登場するニュース・シェーパー (news shaper) という2つの異なる要素があると指摘している。ニュース・メーカーの登場は、ニュース・メディアの役割や特定の個人や組織の知名度によって説明される部分が多く、ジャーナリストもしくは組織としてのニュース・メディアによる意識的な選択がその登場に与える影響には限界があるのに対し、ニュース・シェーパーの登場にはジャーナリストもしくはニュース・メディアの選択が大きく影響するという点で、両者を区別して分析する必要があると彼は主張している。

以下においては、このようなニュース・ソース概念の違いも含め、主に研究関心の違いを基準に、ニュース・ソースに関する欧米の既存研究を①

ニュース・ソースとジャーナリスト（およびニュース・メディア）との相互作用に関する研究と②ニュース・ソースの分布および構成に関する研究の2つに分け、検討する。

2. ニュース・ソースとジャーナリストの相互作用 およびその影響

(1) ニュース・ソースとジャーナリストの相互作用

ニュース・ソースとジャーナリストの相互作用に注目した研究者は、その相互作用の結果としてジャーナリストがどのように変化するのか、またその変化は彼らが生産するニュースの内容にどのような結果をもたらす得るのかに関心を寄せている。

両者の相互作用に関する先駆的な研究を行った Giber and Johnson (1961) は、市庁舎の番記者たちに対する参与観察とインタビューから、日常的に相互作用する記者とニュース・ソース（市の委員や行政官）との相互作用について次のような結論を出している。

〔市の委員や行政官〕は、説得と社交を用い、記者を彼らの準拠枠に同化させようと試みる。（中略）記者たちの「行動の理念的基盤」は、ジャーナリストとしての使命感や公衆への奉仕といったシンボルから成り立っている……。……記者たちが、ニュース・ソースによる同化の試みに公然と抵抗するとはいえ、彼らは「公衆への奉仕」というシンボルを、市に対する強い「内集团的忠誠心」(ingroup loyalty) へと弱化させてしまうのである。（p. 297）

すなわち、ニュース・ソースとの日常的な相互作用（とりわけ非公式的な相互作用）のなかで、記者の行動規範が実現されるのは困難になり、両者の理念からはそもそも異なるはずのニュース・ソースと記者の目標が、相互作用の進行につれ、ある程度重なるようになるというのである。

イギリスの犯罪報道担当記者とニュース・ソース(警察)との相互作用を参与観察した Chibnall(1975)も、両者のパーソナルな相互作用が記者側にもたらす影響を重視しているが、さらに彼は、このようなパーソナルな相互作用にこそ記者の既得権益がかかっていることを指摘していて興味深い。すなわち、ニュース・ソースとの非公式的な関係を築くことが、記者として生き残るための必修条件であり、そのような関係の量や質が、その記者の地位を決める基準になるというのである。ニュース・ソースによって公式的に提供される情報の不適切性や不十分さゆえに、記者はニュース・ソースとの非公式的な関係を追求するための「余分な努力」を払うことになるが、実はその公式情報の不適切性や不十分さが記者個々人のテリトリーを守ってくれる潜在的な機能を果たしていると彼は分析する。

また彼は、両者の道具的 (instrumental) 関係と情緒的 (affective) 関係の不可分離性にも言及している。情報を求める関係は、両者の間に親しい関係の発達をもたらす、また親しい関係を築くことで情報を求めることも可能になるということである。

そして、以上のようなニュース・ソースと記者との関係および相互作用の特徴が、記事の選択過程や作成過程に及ぼす影響について、Chibnall (1975: 59-60) は次のように述べている。

[Gieber and Johnson (1961) が同化と呼んだニュース・ソースの試み] は、事実上、一つの複雑な社会化の過程であり、それによってジャーナリストの準拠枠、業務遂行の方法、そして記者個人の知覚および理解の体系が、彼のニュース・ソースの期待と調和するようになる。……[中略]……[ジャーナリスト] はニュース・ソースの都合の悪いときに情報を求めなくなり、ニュース・ソースの抱える問題に同情するようになり、与えられた情報を忠実に報道するようになる……[中略]……ニュース・ソースの期待を満足させることにより、記者は

いい記事をもたらうだけでなく、ニュース・ソースから尊敬されるようになるのである。……[中略]……確かに同化の程度は記者によって違うが、誰も自分のニュース・ソースとの関係から完全に影響されないわけにはいかないのである。

このようなニュース・ソースとの協調関係は、情報の収集段階だけではなく、収集した情報を記事に書き上げるときにも影響を及ぼし、ニュース・ソースに対する批判を躊躇させる傾向を生むと Chibnall は指摘している。

Giber and Johnson (1961) と Chibnall (1975) の観察は、比較的長い、持続的な両者の相互作用を対象としており、「意図的な説得」によるものなのか「関係発展に伴う同情や共感」によるものなのかの違いはあるが、その観察結果からともに「ニュース・ソース優位モデル」ともいえるべき結論を出している。一方で、Gans (1979) や Reese (1991) は、より広い範囲の相互作用を考慮に入れ、より多様な相互作用の結果を予測できるモデルを示している。

例えば Gans (1979: 116-117) は、ニュース・ソースとジャーナリストの相互作用を「ダンス」に喩え、このダンスでより多くリードを取るのはニュース・ソースであるとニュース・ソースの相対的優位を指摘しながらも、両者の相互作用を「綱引き」(tug of war) にも比喩し、両者の対抗・緊張関係にも言及している。

Reese (1991) はニュース・ソースとメディアの相互作用を両者の力関係 (power relationship) の側面で捉え、両者の相互作用を表1のような枠組により具体化している³。

³ 彼のいうパワーとは、必ずしも明確な定義はなされていないが、関係のなかで誰が誰に依存しているのかという観点から考えられており、一方の参加者の目的達成が他方の参加者の統制している資源にかかっている時、依存関係が生じるとする DeFleur and Ball-Rokeach (1989) の考え方に基づいている。

表1. メディアとニュース・ソースとの相互作用—Reese (1991) の分類枠組

		メディアのパワー	
		強	弱
ニュース・ソースのパワー	強	共生関係	ニュース・ソースによるメディアの利用と操作
	弱	メディアによるニュース・ソースの周辺化	—

彼の分類によると、パワーの強いメディアとやはりパワーの強いニュース・ソースとの相互作用は、しばしば共生関係 (symbiotic relationship) をもたらすとされる。両者はお互いを必要としており、相互作用が両者にとって互いの利益になるよう努める。場合によっては、両者の間に競争関係・敵対関係が生まれることもあるが、その競争や敵対は両者の共有された価値、共生関係において重要となる価値の文脈を超えない範囲内にとどまると Reese (1991: 325) は予測する。

パワーの弱いメディアとパワーの強いニュース・ソースとの相互作用は、ニュース・ソースによるメディアの利用と操作 (co-optation and manipulation) に繋がるとされる。またニュース・ソースはメディアからのアクセスを拒否したり、メディアのバイアスを主張するなどの方法で、常にメディアのパワーを弱めようとするとは主張している (Reese, 1991: 326)。

次にパワーの強いメディアとパワーの弱いニュース・ソースとの相互作用は様々な状況をもたらすと考えられる。その一つは、メディアがパワーのないニュース・ソースを周辺化する (marginalize) ことであるとされ、Gitlin (1980) の研究が示した学生運動の報道をその一例として挙げている。

最後にパワーの弱いメディアとパワーの弱いニュース・ソースの相互作用

用は最もその例を見つけるのが難しいカテゴリーであるが、オルターナティブ・ジャーナリズム活動がこれにあたるであろうとしている。

このようなニュース・ソースとメディアの持つパワーの強弱に、個人レベル、組織内レベル、組織間・産業・制度レベルという三つの分析レベルを加えることで、Reese (1991) はニュース・ソースとジャーナリストの個人レベルにおける相互作用から、メディアと他制度との相互作用までを包括する分析枠組みを提示しているのである。

ニュース・ソースとジャーナリストの相互作用がどのような結果をもたらすかではなく、なぜある特定のニュース・ソースとの相互作用が開始されるのか、言い換えれば、なぜある個人や組織は他の個人や組織よりもニュース・ソースとして好まれるのかについての分析は Gans (1979) によって示されている。

彼は、参与観察の結果に基づき、ジャーナリストによるニュース・ソース選択について2つの次元からなる体系的な枠組を示している。その2つの次元とは、利用可能性の次元 (source availability) と適切性の次元 (source suitability) である。彼はこの2つの次元もしくは一つの連続する過程の2つの段階において、どのような要因が両者の接触を規定しているのかに分析の焦点を合わせている。

ニュース・ソースの利用可能性次元、すなわちニュース・ソースとジャーナリストの接触段階に影響を与える要因として Gans (1979) は①ニュース・ソースになろうとする動機 (incentives), ②権力 (power), ③適切な情報を提供できる能力 (ability to supply suitable information), ④ジャーナリストとの地理的・社会的近接性 (geographic and social proximity), ⑤ロジスティックスおよび資源の利用可能性 (logistics and availability) を挙げている。

次に、ニュース・ソースとしての適切性次元に含まれる要因としては、①過去における適切性 (past suitability), ②生産性 (productivity), ③信

頼性 (reliability), ④真実性 (trustworthiness), ⑤権威性 (authoritativeness), ⑥簡単明瞭に答えられる能力 (articulateness) が挙げられている。

そしてこのような要因を最もよく満足させる個人や組織は、社会における政治・経済エリートなのであると彼は指摘している。

(2) ニュース・ソースとアゼンダ・ビルディング (agenda-building)

マス・メディアの報道は、イシューやイベントの相対的重要性に関する公衆の認知に影響を与えるとするマス・メディアの議題設定 (agenda setting) 効果は、Cohen (1963) の見解を経験的に検証した McCombs and Shaw (1972) の先駆的研究以来、200件を超える研究を導くなど (Rogers, Dearing, and Bregman, 1993), マス・コミュニケーション研究分野における重要なテーマの一つとして注目を集めてきた。

マス・メディアの議題設定効果を検証する研究は、マス・メディアの強調したイシューと公衆が重要と知覚したイシューの間に関連があることを示す方法を取ってきたが、Weaver and Elliot (1985) は、それだけでマス・メディアの議題設定効果を認めるのは正確でないと主張する。マス・メディアの議題設定効果を正確に確認するためには、もう一つ、マス・メディアの強調したイシューが、マス・メディア自身によって選択され、重みづけされたものであることを検証する必要があるというのである。すなわち、マス・メディアによって重要であると強調されたアゼンダが、マス・メディア外部に存在する他の要因によって形成されたものであれば、従来の議題設定効果は「厳密に言って」マス・メディアの効果ではないということである。従って、マス・メディアの議題設定効果を検証するためには、まずマス・メディアの議題がどのようにして形成されるのかを確認する必要があるというのである。Lang and Lang (1981) は、このようにマス・メディアの議題が形成されていく過程を「アゼンダ・ビルディング (agenda-building)」と呼んでいる。

Rogers, Dearing, and Bregman (1993: 73) は、メディア・アゼンダがどのようにして、誰によって設定されるのかに関し、より理解を深めることが必要であると述べると同時に、「メディア・アゼンダは、ニュース組織間の競争、ニュース処理における慣例やルーチン、特定の 이슈をめぐり利益集団の存在などの文脈の中で、ニュース・メディアと彼らのニュース・ソースとの間の相互作用過程を通じて構築される」との認識を示した (Rogers and Dearing, 1988; Kosicki, 1993; McCombs, 1993 などとも同様の認識を示している)。

ニュース・ソースがメディア・アゼンダの形成過程における重要な要因の一つであるという認識から、アゼンダ・ビルディングに関心を持った研究者によってニュース・ソースの影響力に関する研究が幾つか行われている。

例えば Weaver and Elliot (1985) は、このようなアゼンダ・ビルディングの過程を検証するため、市の委員会および議会の議事録とそれに関するローカル新聞の報道記事を内容分析し、議事録における 이슈強調の度合と報道における 이슈強調の度合を比較する方法で、両者の関連を調べるとともに、 이슈の種類によってマス・メディアの選択・重みづけ行為がどのように異なるのかを分析した。

その結果、19 のカテゴリーに分類した議事録の内容と報道記事との間に .84 という強い相関関係 (Spearman's rho) があることが確認され、ローカル新聞における 이슈の強調は市議会のそれをかなりの程度反映していることが明らかにされたのである。

しかし、カテゴリーごとにより詳しく検討してみると、あるカテゴリーのトピックに対しては、報道記事の強調順位と議事録のそれとの間にかなりの違いがあり、 이슈の内容によってマス・メディアのアゼンダ形成に対するニュース・ソースの影響は異なるという結果もあわせて報告されている。

Weaver and Elliot (1985) は、このような内容分析の結果と記者とのインタビューから得た情報をもとに、優位な地位にあるニュース・ソースは、メディアのアゼンダにかなりの影響を与えることができるが、ジャーナリストの選択やニュース判断もまたアゼンダ形成に有意な役割を果たしていると結論づけている。

Turk (1986) は、メディアに対する情報助成 (information subsidy) という観点から、メディアのアゼンダ形成過程を分析している。情報助成の概念を考案した Gandy (1982) は、情報入手するために必要とされる費用が小さければ小さいほど、その情報が利用される可能性は高くなるため、ジャーナリストに速く、安く情報を提供するニュース・ソースは、提供した情報がジャーナリストによってニュースとして使われる可能性を高めるとし、ニュース・ソースによるこのような情報提供行為を「情報助成」と呼んだのである。

ローカル新聞に対する州政府広報官の情報助成を分析対象とし、情報助成のアゼンダ・ビルディング効果の検証を試みた Turk (1986) の分析の結果、助成された情報の件数とその情報を基に作成された記事件数をデータとしたイシュー順位の間には .84 (Kendall's tau-b) という順位相関があり、アゼンダ・ビルディングの効果は検証されたとしている。一方で、助成された情報と研究の対象となった州政府の6つの機関に関する全記事におけるイシュー順位の間にはそれほど強い関連が見られなかったことから、Turk (1986: 23-24) は、助成した情報がジャーナリストによって利用されれば、州政府の機関はイシューの重要性を伝達することに全体的に成功するが、これらの州政府機関以外のニュース・ソースからも情報が提供される場合には、報道内容におけるアゼンダは州政府機関のアゼンダではなく、その他のニュース・ソースのアゼンダもしくはジャーナリストのアゼンダを反映するようになると結論づけている。

3. 報道内容におけるニュース・ソースの分布および構成

最終的な報道内容に誰の情報や意見が載るのか、またどのニュース・ソースがどのようなチャンネルで接触されるのか、ニュース・ソース研究の多くは、このような研究問題の解明に関心を向けてきた。Sigal (1973)の研究に端を発するこれらの研究からは、いくつかの傾向が繰り返し発見されているが、理論的な基盤の弱さを含め、まだその研究の水準は決して高いとはいえない。

(1) Leon Sigal の先駆的研究

Sigal(1973)は、「ある絶対的または客観的現実を、それが我々の手によって現実となり得た手続きとの関連なしに論じるのは無意味なことである」というヘーゲルの言葉を著書の巻頭に引用しながら、「ニュースが何であり、さらに、それが何を意味するものなのかを理解するためには、それがどのようにして作られるのかを理解することが不可欠である」(p. 2)とし、ニュースが作られる過程に対する分析の一つとしてニュースの内容に現れるニュース・ソースとニュース収集チャンネルの分布に着目した。

彼はニュース・メディア組織のルーチンや官僚制的な運営スタイルがニュース内容の形成やニュース収集の構造にかなりの影響を及ぼすと予想し、次のような2つの仮説を検証しようと試みたのである。

一つは、全国紙（対象としたのはニューヨーク・タイムズ紙とワシントン・ポスト紙である）におけるほとんどの全国ニュースと外信はルーチン・チャンネルから入ってくるというものであり、もう一つは、そのようなニュースは、その主題に関係なくアメリカ政府の機関や公職者がニュース・ソースになっているというものである。

チャンネル、すなわち情報の入手経路は、ルーチン (routine)、非公式 (informal)、開発 (enterprise) の3つのカテゴリーに分類された。まず

ルーチン・チャンネルには、(1) 公判、公聴会などの公式的な出来事、(2) 報道資料、(3) スポークスマンによる毎日のプリーフィングや放送によるインタビューなどを含む記者会見、(4) 演説・記念式など発生的でないイベントが含まれる。非公式チャンネルには、(1) 背景説明 (back-ground briefing)、(2) リーク (leak)、(3) 団体の会合や労働組合の大会のような非政府的な出来事、(4) 他のニュース・メディアの記事、記者に対するインタビュー、新聞の社説や論説が含まれる。最後に開発チャンネルには、(1) 記者の主導によるインタビュー、(2) 記者が直接体験によって得た火事、暴動、自然災害などの発生的な出来事、(3) 書物や統計データなどからの引用を含む独自の調査、(4) 記者独自の結論や分析が含まれる。

ニュース・ソースは、(1) アメリカの政府公職者、(2) 外国の政府公職者、国際機関の公職者、(3) アメリカの州・地方政府の公職者、(4) 公職と関係ない外国人、(5) アメリカの一般市民の5つのカテゴリーに分類された。

両新聞の20年間（5年おきに2週間分の記事をサンプリング）の一面記事を対象にした（ニューヨーク・タイムズ紙599件、ワシントン・ポスト紙547件）分析結果は以下のようなものであった。

まずチャンネルの分布はルーチン・チャンネルが全体の58.2%と一番多く、開発チャンネルが25.8%で二番目、非公式チャンネルは3番目で全体の15.7%を占めている。これには通信社からのニュースも含まれているのだが、両新聞のスタッフによる記事だけをみても、ルーチン・チャンネルは開発チャンネルの2倍になる結果であった。記事によっては一つのチャンネルに依存しているものも、また多くのチャンネルから情報を収集して構成された記事もあったが、全記事の3分の1は一つのチャンネルに依存しているものであったと彼は報告している。これらの記事におけるチャンネルは、圧倒的にルーチンなものが多く、その割合は74.6%であった。複数のチャンネルに依存している記事は、そのチャンネルを優

先的な (primary) ものと二次的な (secondary) ものに分けて分析しているが、優先的なチャンネル⁴に限るとルーチン・チャンネルは 68.6% であった。

ニュース・ソースに関する分析結果においては、その割合からみて最も重要なニュース・ソースはアメリカ政府の公職者または政府機関であることが明らかにされた。このニュース・ソースは、全ニュース・ソースのほぼ半分を占めていたのである。中でも、行政府からのニュース・ソースが大半を占めており、司法関係のニュース・ソースは 2%、議会関係のニュース・ソースは 6% にすぎないという結果が出されている。

また政府公職者や政府機関のニュース・ソース独占傾向は、一つのニュース・ソースしか登場しない記事においてより顕著になっており、複数のニュース・ソースが登場する記事においても優先的なニュース・ソースは半分以上 (53.8%) がオフィシャル・ソースであったという。

時間的な経過のなかでも、アメリカの政府公職者のニュース・ソース独占状況にはほとんど変化がなく、さらに、アメリカの政府公職者はルーチン・チャンネルにおいてもまた非公式チャンネルにおいても支配度を増してきた傾向が分析結果から示された。

しかし、この期間においてひとつ注目すべき変化が現れた。それは、記者のルーチン・チャンネルへの依存が減少し、それに代わって、開発チャンネルの利用が増加したことである。しかし、優先的なニュース・ソースにおいてはあまり変化がないことから、このような変化は、ルーチン・チャンネルから入手した情報を他のニュース・ソースに対するインタビューなどで補強する取材行動が増えてきたことを表していると思われる。と彼は解釈している。

⁴ ここで優先的なチャンネルというのは、(1) 記事のリードまたは記事の多くの部分を構成しているチャンネル、(2) その記事がニュースとして登場するタイミングを説明しているチャンネル、の2つの基準を満足させるチャンネルである。

(2) 後続研究の展開と新しい方向性

以上で述べたような Sigal (1973) の研究が一つの典型となり、ニュース・ソースの分布に関する研究は、ニュース生産過程に用いられる資源や手続きの違いを軸に、ローカル記事 (Soloski, 1989)、特集記事 (Hansen, 1991)、突発事件記事 (Smith, 1993) などとその分析対象を広げる展開を見せる一方、ニュース・ソースの分布や構成の違いを説明する要因、例えば地理的近接性や出来事の葛藤性 (Martin, 1988; Berkowitz and Beach, 1993 など)、ジャーナリストの性別 (Zoch and Turk, 1998) などについて分析を進めてきている。

またメディアの違いに着目し、TV ニュースにおけるニュース・ソースの分布を調べた研究も幾つか行われている (Hackett, 1985; Berkowitz, 1987 など)。特に Hackett (1985) は、アクセスのヒエラルヒー (hierarchy of access) という新しい分析を提案している点に特徴がある。彼のいうアクセスのヒエラルヒーとは、ニュース・ソースがどういう状況またはどういう形式で登場するかに関する分類体系で、公式的な演説、記者会見、公式のインタビュー、アドホック・インタビュー、即席の会話などに分かれる。はっきりした根拠はないが、異なる登場形式は視聴者に異なる権威性を伝達すると考えるのが妥当であり、アクセスの位階で高い位置にあるほど、ジャーナリストの介入は少なくなる反面、伝える情報に対するニュース・ソースの準備は高度になるとされる。すなわち、ジャーナリストとニュース・ソースとの相互作用過程に対するニュース・ソース側の統制力を基準に「アクセスの位階」を設定しているのである。

後続研究の分析結果は、対象とした記事の類型やメディアの違いによって多少異なるが、概ね Sigal (1973) のそれと大差なく、オフィシャル・ソースとルーチン・チャンネルへの強い依存傾向を繰り返し確認しているとまとめられよう。上述した Hackett (1985) のアクセスのヒエラルヒー分析においては、オフィシャル・ソースが他のニュース・ソースに比べ、

より権威性があり、高度に準備できる形でメディアにアクセスしていることが明らかにされている。

Sigal (1973) の根本的な研究関心に立ち戻って考えると、このような分析の結果が意味するのは、まずニュースというものは、それが作られる過程から考えるとある利害関係を持っている特定の個人・組織の情報や意見を、優先的にそして日常的に収集し、それを基に構成したレポートであるということになる。従って、多様な意見を伝えるべきであるとする素朴な民主主義的規範から逸脱しているとの批判も可能となる。

ただ、ニュース・メディアの社会的機能を考えれば、ニュース・ソースの分布や構成を調べる研究が明らかにしてきた結果は、ある意味当然のことであり、また了解済みの事項であるともいえる。もちろん当然視され、了解済みとされていることを問い直すところにこれらの研究の意義を認めることもできるが、少なくとも新しい研究を導くパラダイムとしての力を維持するためには新しい方向へのさらなる展開が必要であると考え。

そういう点で、後続研究によって示されたいくつかの考察や新しい分析方法はニュース・ソース研究の今後の展開において大きな重要性を持っていると思われる。例えば、Soloski (1989) は社会的構成論 (social construction theory) の視点に立ち、記者がどのようにニュースを収集し、どのようなタイプのニュース・ソースを利用するかが重要な研究の対象になるのは、それが「公衆にどのような情報が提供されるのかを決定するだけでなく、どのような社会のイメージが提供されるのかをも決定するからである」(p. 864) と論じ、ニュース・ソースの分布や構成が特定の個人や組織を正当化し、逆に特定の個人や組織を周辺化していく過程の分析を提案している。

また Smith (1993) は、イシューのフレーミング (framing) という視点でニュース・ソースの問題を取り上げているが、ニュース・ソースとフレーミングとの関連も多く、関心が払われるべき重要な今後の研究課題で

あると思われる。

ニュース・ソースのネットワーク分析を試みた Reese et al. (1994) の研究や「ニュース・シェーパー (news shaper)」という概念を提案した Soley (1992) の研究なども、比較的単純な発見の蓄積に止まっていたニュース・ソース研究に新しい展開の可能性を与えているといえよう。

4. 終わりに

これまでのニュース・ソース研究は、いかにニュース・ソースがニュースの内容形成に影響を与えうるのか、またいかに多様な意見の反映が制限されているのかを明らかにしようとしてきた。そしてそのような作業を通じて、ニュースは客観的な現実の描写でも、様々な意見の中立的な伝達でもないという批判的な認識を強調してきたのである。

このような研究モデルの中で、これまでのニュース・ソース研究は、ニュース・ソースではなくジャーナリストを研究の中心においてきたように思われる。ニュース・ソースがどのような行動をするのかではなく、ニュース・ソースとの関連でジャーナリストがどのような行動をするのかに注目し、ニュース・ソースの変化ではなくジャーナリストの変化を、ニュース・ソースのパフォーマンスではなくジャーナリストのパフォーマンスを分析し、評価してきたのである。

このようなモデルに基づいた研究も今後さらに続けられる必要があることはもちろんであるが、ニュースの生産過程におけるダイナミックスをより深く理解していくためには、もう一方の展開として、ニュース・ソースの意図や行動、そしてニュースの生産過程への参加やニュースでの登場によってニュース・ソースが経験する変化などを、分析の中心に据えた研究モデルも必要になってくると思われる。

参 考 文 献

- Berkowitz, Dan and Douglas W. Beach (1993) News sources and news context: the effect of routine news conflict and proximity. *Journalism Quarterly*, 70, 4-12.
- Berkowitz, Dan (1987) TV news sources and news channels: a study in agenda-building. *Journalism Quarterly*, 64, 508-513.
- Brown, Jane Delano, Carl R. Bybee, Stanley T. Wearden and Dulcie Murdock Straughan (1987) Invisible power: newspaper news sources and the limits of diversity. *Journalism Quarterly*, 64, 45-54.
- Chibnall, Steve (1975) The crime reporter: a study in the production of commercial knowledge. *Sociology*, 9: 1, pp. 49-66.
- Cohen, Bernard (1963) *The press and foreign policy*. Princeton University Press.
- DeFleur, Melvin L. and S. Ball-Rokeach (1989) *Theories of mass communication*. Longman.
- Gandy, Oscar H. (1982) *Beyond agenda-setting: information subsidies and public policy*. Ablex Publishing Co.
- Gans, Herbert J. (1979) *Deciding what's news: a study of CBS Evening News, NBC Nightly News, Newsweek, and Time*. Pantheon Books.
- Gans, Herbert J. (1983) News media, news policy and democracy: research for the future. *Journal of Communication*, 33: 3, 174-184.
- Gieber, Walter and Walter Johnson (1961) The city hall 'beat': a study of reporter and source roles. *Journalism Quarterly*, 38, 289-297.
- Hackett, Robert A. (1985) A hierarchy of access: aspects of source bias in Canadian TV news. *Journalism Quarterly*, 62, 256-265, 277.
- Hansen, Kathleen A. (1991) Source diversity and newspaper enterprise journalism. *Journalism Quarterly*, 68, 474-482.
- Kosicki, G. M. (1993) Problems and opportunities in agenda-setting research. *Journal of Communication*, 43: 2, 100-127.
- Lang, Gladys Engel, and Kurt Lang(1981) Watergate: an exploration of the agenda-building process. *Mass Communication Review Yearbook*, 2, 447-468.
- McCombs, M. E. (1993) The evolution of agenda-setting research: twenty-five

- years in the marketplace of ideas. *Journal of Communication*, 43 : 2, 58-84.
- McCombs, M. E., & D. L. Shaw (1972) The agenda-setting function of mass media. *Public Opinion Quarterly*, 36, 176-184.
- Martin, Shannon R. (1988) Proximity of events as factor in selection of news sources. *Journalism Quarterly*, 65, 987-989, 1043.
- Reese, Stephen D. (1991) Setting the media's agenda: A power balance perspective. *Communication Yearbook*, 14, 309-340.
- Reese, Stephen D., August Grant, and Lucig H. Danielian (1994) Structure of news sources on television: a network analysis of "CBS News," "Nightline," "MacNeil/Lehrer," and "This Week with David Brinkley". *Journal of Communication*, 44 : 2, 84-107.
- Rogers, E. M., & J. W. Dearing (1988) Agenda-setting research: where has it been, where is it going?. *Communication Yearbook*, 11, 555-594.
- Rogers, E. M., J. W. Dearing, & D. Bregman (1993) The anatomy of agenda-setting research. *Journal of Communication*, 43 : 2, 68-84.
- Sigal, Leon V. (1973) *Reporters and officials: the organization and politics of newsmaking*. D. C. Heath and Company.
- Smith, Conrad (1993) News sources and power elites in news coverage of the Exxon Valdez oil spill. *Journalism Quarterly*, 70, 393-403.
- Soley, Lawrence C. (1992) *The news shapers: the sources who explain the news*. Praeger.
- Soloski, John (1989) Sources and Channels of local news. *Journalism Quarterly*, 66, 864-870.
- Turk, Judy Vanslyke (1986) Information subsidies and media content: a study of public relations influence on the news. *Journalism Monograph*, 100.
- Weaver, David and Swanzy Nimley Elliott (1985) Who sets the agenda for the media?: a study of local agenda-building. *Journalism Quarterly*, 62, 87-94.
- Zoch, Lynn M. and Judy Van Slyke Turk (1998) Women making news: gender as a variable in source selection and use. *Journalism and Mass Communication Quarterly*, 75, 762--775.